

日常使いの 近代「セトモノ」展

～蔵に眠っていた食器～

令和7年秋季企画展



富士見市立難波田城資料館

はじめに

私たちの生活の中で、食器に接する機会は多くあります。食事の際に料理を盛り付ける碗や皿、湯飲みやカップなど、食器は私たちの身近で無くてはならないものの一つです。汁椀など木製の器もありますが、食器のほとんどが陶磁器です。国内の陶磁器は、古代から中世にかけて焼かれた陶器、近世に入り初めて焼かれた磁器と大きく分かれていますが、今日でもその技術は受け継がれ、私たちの食卓を彩ります。本展は、そのような陶磁器の歴史の中でも、明治時代から昭和前期までの近代と呼ばれる時代に焦点を当て、その時代で一般的に使われていた陶磁器について、掘り下げました。

今日でも食器を「セトモノ」と呼ぶことがありますが、漢字では「瀬戸物」と書き、陶磁器産地として著名な瀬戸・東濃地域(愛知県・岐阜県)に由来しています。「セトモノ」は近代においても、今日同様に人々の暮らしの中に浸透し、欠かせないものとして使われてきました。本展では、それら瀬戸・東濃地域で焼かれた近代の陶磁器(セトモノ)について解説しています。

展示する資料の多くが、ご自宅の蔵などで保管されていたもので、様々な理由により市民から当館に寄贈されたものです。御覧頂く中には、「子供の頃に祖父母の家にあった」や「今でも自宅の蔵に眠っている」といった少し懐かしいものもあるかも知れません。本展を機会として、近代の陶磁器の様々な器種やそれらを飾った意匠や文様、その生産地などについて知っていただければ幸いです。

令和7年11月15日
難波田城資料館 館長 駒木敦子

目次

はじめに・目次・例言

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 陶磁器産地の瀬戸・東濃……1 | 7. 記念の盃……………8 |
| 2. 印判手の器……………2 | 8. 除隊記念の盃や爛徳利……10 |
| 3. 手描きの器……………4 | 9. 印物……………11 |
| 4. 高田の徳利……………5 | 10. 遺跡出土の近代陶磁器……12 |
| 5. クロム青磁……………7 | 主要参考文献 |
| 6. 市之倉の盃……………8 | |

例言

1. 本書は富士見市立難波田城資料館が令和7年11月15日(土)から令和8年1月12日(祝・月)まで開催する、令和7年秋季企画展「日常使いの近代『セトモノ』展 ～蔵に眠っていた食器～」の展示パンフレットです。
2. 本書の構成は、展示構成と一部異なります。
3. 図版掲載した実物資料のうち、特に記載の無いものは当館所蔵資料です。
4. 本展開催にあたり、富士見市教育委員会生涯学習課より出土遺物を借用しました。
5. 本企画展の企画・構成および本書の編集は、資料館職員の佐藤一也が担当し、資料館職員が補佐しました。

【陶器】土器のさらに進歩した焼物で、素地が十分焼き締まらず吸水性があり、不透明で、その上に光沢のある釉薬を用いたもの。

【磁器】素地がよく焼き締まってガラス化し、吸水性のない純白透明性の焼物。

【陶磁器】陶器・磁器類の総称。(広辞苑第五版より引用)

1. 陶磁器産地の瀬戸・東濃^{とうのう}

富士見市の近代の陶磁器は、日本全国様々な地域で生産されましたが、食事で使う皿や碗、飲酒で使う徳利とっくりや盃など日常で使う器の多くが瀬戸・東濃地域のもんです。瀬戸(現・愛知県瀬戸市)と東濃(現・岐阜県多治見市及び土岐市周辺)は、山一つを挟んだ位置にあり、古来焼き物の産地として著名でした。古代には須恵器すえきや灰釉陶器かいゆうとうきと呼ばれる土器や施釉陶器せゆうとうを生産し、その後の中世には陶器の一大産地として日常雑器の生産のほか、茶の湯の流行とともに抹茶碗等の茶陶ちやとうも焼成(本展では窯で器を焼き上げること)して茶人に喜ばれました。

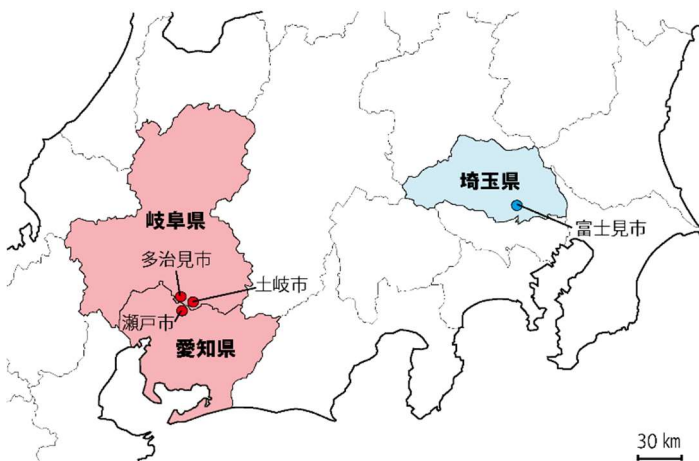
江戸時代に入ると、大陸から導入された技術により、磁器の焼成が肥前(現・佐賀県及び長崎県)で始まります。瀬戸や東濃地域でも、19世紀以降に磁器焼成が開始されました。そして、明治時代以降も瀬戸・東濃地域では器を焼く窯が途絶えることなく、現在に至ります。本展では、近代の陶磁器のうち特に数の多い磁器製品について、その器種や染付技法、生産地を中心に紹介します。

瀬戸では、陶器を主に焼いていた瀬戸地区や
あかつしなの
赤津地区、品野地区に磁器生産技術が伝わると、
かまや
器を焼成する窯屋の多くが磁器生産に転業しまし
た(赤津地区ではこの時磁器焼成が定着せず、現在
は伝統的陶器を焼成する地域として栄えていきま
す)。瀬戸は国内消費地へ向けた日常雑器を焼成し
ていましたが、窯の多くがコーヒークップなどの
輸出目的の器を焼成していたため、産業発展と輸
ないこくかんぎょうはくらんかい
出品目の育成を目的とした内国勸業博覧会へ出品
等もしていました。

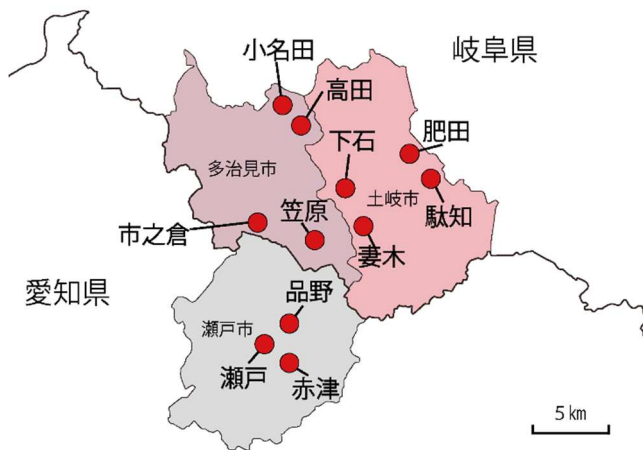
東濃では、海外への輸出を見据えた瀬戸に比べ、国内需要に応えようと安価で良質な器を多量に焼成し、国内消費地へ供給していました。また、東濃の特徴として同業組合による生産品種の分業生産が行われたことが挙げられ、地域(町・村)ごとに焼成する器が異なりました。磁器生産では、燗徳利かんを下石おろし(現・岐阜県土岐市)、コーヒー碗つまぎを妻木(現・土岐市)、小皿ひだを肥田(現・土岐市)、鉢類や

井を駄知(現・土岐市)、盃を市之倉(現・岐阜県多治見市)、茶碗(飯碗)を笠原(現・多治見市)で焼成しました。また、陶器では通い徳利を高田及び小名田(現・多治見市)で焼成していました。

本展は、まず近代陶磁器の中心である磁器について、その意匠・文様の絵付け技法について取り上げた後、高田で焼かれた通い徳利や市之倉の盃、遺跡出土の近代陶磁器について触れていきます。紹介する磁器は、富士見市との距離や立地からその多くが瀬戸・東濃で焼成されたものと考えられます。しかし、近代磁器の産地特定は難しいため、本展で紹介した磁器の中に遠く離れた伊万里（現・佐賀県）や砥部（現・愛媛県）等の他の産地が紛れていることがあるかもしれませんが、ご容赦いただければ幸いです。



富士見市と瀬戸・東濃地域の位置図



近代陶磁器の各生産地の位置図

2. 印判手の器

(1) 印判手とは

印判手は、明治時代以降に多用された^{えいづけ}絵付けの技法で、その定義は『近代のいんぱん手 ―その意匠と時代背景―』を参照すると、

明治時代から昭和前半に生産された磁器に、手描きでなく、印刷技術に応用した技法で、西洋より導入された酸化コバルト(俗称ベロ^{あい}藍)による同一の意匠や文様を施したものとなります。ベロ藍の呼称は、ドイツのベルリンから来たものとして、ベルリンのラテン語読み「ベロリン」の「ベロ」と藍色の「藍」との合成語だと言われています。この印判手の名称は、古美術評論家により江戸時代の絵付け技法である「コンニャク印判」を由来にして名付けられ、研究者によっては「印版手」とすることもあり、その表記については様々な意見があるようです。

印判手は印刷技法による絵付けで、前代の江戸時代の手描きによるものに比べ、器^{うつわ}全面への絵付けが容易で、意匠・文様の幅が飛躍的に広がりました。印判手の技法は、碗や皿のほか、鉢、湯飲み、徳利などの日常雑器に使用されたほか、植木鉢やタイル、湯たんぽ、便器に至るまで様々な磁器の日用品に使われました。

印判手の器の産地は、江戸時代からの磁器の一大生産地である瀬戸(現・愛知県北東部)・東濃(現・岐阜県南東部)、伊万里(現・佐賀県西部)のほか、会津本郷(現・福島県西部)、小谷(現・広島県中央部)、砥部(現・愛媛県中央部)などがあります。



型紙摺りの皿



銅版転写の皿



(2) 型紙摺り・銅版転写・ゴム版

印判手の技法は、「型紙摺り」、「銅版転写」、「ゴム版」と大別されます。

型紙摺りは、型紙を意匠・文様部分でくり抜き、くり抜いた部分に刷毛摺りをして文様を描く技法です。江戸時代から既にあった技法で、江戸時代のものは天然の酸化コバルトである呉須^{ごす}の絵付けであるのに対し、明治時代以降のものは人工の酸化コバルトであるベロ藍で絵付けされています。型紙摺りの型紙は、型紙師と呼ばれる専門の職人により作られ、竹紙と呼ばれる薄い紙2枚^{かきしぶ}を柿渋で貼り合わせ、それを7枚重ねたものを使用しました。着物等で使う型紙は和紙を貼り合わせた厚いもので、器の曲面には合わないものですが、薄い竹紙の型紙だと曲面に合わせられたそうです。



型紙摺りの中皿



型紙摺りの小皿



型紙摺りの湯飲み

銅版転写は、西洋から導入された新技術で、銅板にエッチング技法を施して、その転写紙を器面に貼り付け写し取る技法です。エッチング技法とは、銅板に鉄筆でひっかく様にして傷を付けて描くもので、まず銅板に防蝕剤(蜜蝋とアスファルトの混合物など)を全面に塗り、その上から鉄筆で画線を描いて防蝕剤を削り取ります。その後塩化第二鉄または硫酸銅の液に浸して画線部分を腐蝕させ、凹版の銅版が完成します。ここまでがエッチング技法で、その後は完成した凹版の凹部にベロ藍を摺り込んだ後、その銅版上に印刷紙を乗せて印刷機で印刷します。できた印刷紙(銅版転写紙)を素焼きした器の素地に乗せ、水刷毛で貼り付けて器面にベロ藍の意匠・文様を写したものが銅版転写となります。

この銅版転写は、明治時代中期から大正時代にかけて隆盛した技法で、昭和前期以降にそれまでの転写紙の手摺りが機械摺りへ移り変わりました。また、銅版転写の流行に合わせ、多くの器種ではそれまでの型紙摺りから銅版転写に置き換わりました。この銅版転写の技法は、特に様々な技術開発が行われ、様々な意匠・文様に工夫を凝らした

瀬戸・東濃は「全国一」と呼ばれる印判手の生産地となりました。

なお、東濃の多治見で銅版転写が始められたのは明治22年(1889)頃からで、銅版転写に用いられる転写紙は、美濃和紙の産地として有名な武儀郡上牧村(現・岐阜県美濃市)方面で生産された和紙を用いていました。しかし、地元・多治見での転写紙生産が計画され、明治38年(1905)に銅版転写紙が生産されるようになりました。これにより、東濃各地の銅版転写への需要が満たされ、多くの器が焼成されました。

ゴム版は、その名のとおりゴム板に文様を彫り付けて、そのゴム版を器面に押印する技法です。大きな費用がかからない技法で、資材や職人が不足した昭和前期の戦時中に多く使われました。



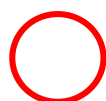
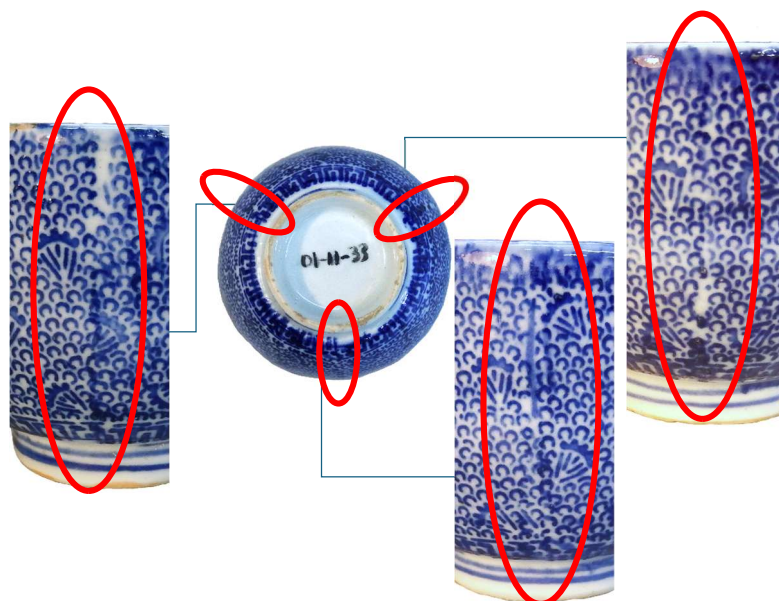
銅版転写の中皿

ちょこっと豆知識1「型紙摺りのズレ」

型紙摺りの絵付けでは、器の曲面に型紙を複数回に分けて刷毛摺りするため、型紙の端の意匠・文様が重なった跡がよく見られます。手描きの絵付けには無い、型紙摺りの特徴の一つです。



型紙摺りの湯飲み



意匠・文様が重なった箇所

3.手描きの器

近代の磁器の多くは印判手による絵付けのものですが、手描きの磁器も焼成されています。磁器の手描きの絵付けは、江戸時代から行われ、顔料は自然物である呉須^{こす}を使っていました。しかし、明治時代以降は先述のとおり人工の酸化コバルトであるペロ藍が使われました。呉須に比べてペロ藍の方が、色が濃く発色が強いため、江戸時代の染付よりも絵柄の線ははっきりとしています。

江戸時代の意匠・文様は、どのようなものを描いているかが判断できるようなしっかりとした筆描きでしたが、幕末以降になると意匠・文様が何を描いているのか少し分かりづらい、やや雑な描き方となっています。これは、近代以降の大量生

産に伴い、より多くの器に絵を描くために、詳細部分が簡略化された意匠・文様になったと考えられます。



手描きの湯飲み



手描きの茶碗

ちょこっと豆知識2「見込みの松竹梅」

湯飲みや皿の見込み(内面の底部分)には、様々な意匠・文様が描かれることがありますが、特に多く描かれるものとして「松竹梅」の文様があります。「松」、「竹」、「梅」の柄を円に配した文様で、江戸時代から碗類などに描かれました。明治時代以降の近代になってもその意匠は残り、器のワンポイントとなっています。幕末頃の呉須の絵柄は雑なものですが、明治時代以降の型紙摺りになると「松竹梅」の絵柄の線がはっきりとして分かりやすくなり、銅版転写ではより細かい部分まで表現されます。これは、それぞれの絵付け技法により変わるもので、特に銅版転写の技法は、ひっかき傷のように細い線を描くことができるので、表現豊かな絵柄となっています。また、銅版転写の絵柄はそれまでの伝統的な文様から、より現代に近いデフォルメされた絵柄で、親しみのある絵柄となっています。



幕末頃の呉須の小皿



型紙摺りの湯飲み



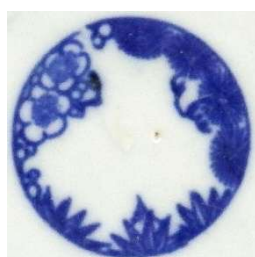
型紙摺りの中皿



型紙摺りの中皿



型紙摺りの鉢



銅版転写の中皿



銅版転写の湯飲み

4.高田^{たかた}の徳利

(1) 江戸時代の高田の徳利

現・岐阜県多治見市の高田地域では、江戸時代中期頃から徳利が盛んに焼成され、当時の大消費地であった江戸に運ばれ使用されていました。この徳利は、黄色味がかった灰釉^{かいゆう}と呼ばれる釉薬^{ゆうやく}をかけた器の表面に、酒屋の屋号などを釘で彫り付けて販売したとされます。その後幕末になると、徳利を製作する窯屋で焼成前の器面に屋号や地名を彫り入れてから釉薬がけ・焼成をするようになります。つまり、幕末を境に、「消費地である江戸の酒屋が、通い徳利として屋号を刻んで販売」したものから、「酒屋の屋号の彫り付けを生産地である高田の窯屋が受注して生産」する体制に移り変わりました。



高田・小名田の位置図

(2) 明治時代から昭和初期の高田の徳利

明治時代になると、高田の徳利は受注した酒屋の店名や屋号、電話番号等を焼成前に鉄釉^{てつゆう}や黒釉^{こくゆう}で筆書きし、灰色の釉をかけて焼成して販売していました。この頃の高田の徳利も江戸時代と同様に、酒屋が客に徳利を貸して酒を販売し、客は飲んだ後の空になった徳利を酒屋に持っていき再び酒を注いでもらう、通い徳利として使用されました。高田の徳利は、生産地の名前をとった「高田徳利」や「通い徳利」のほか、酒ばかり買ってしまう、貧乏になってしまう人がいたことから「貧乏徳利」とも呼ばれていました。高田徳利が大量に焼成され、消費された明治時代から昭和初期までは、徳利の首に紐を巻き付けて肩にぶら下げ、酒屋に向かう酒飲みの姿が多く見られました。高田徳利の形状は、首が短く肩が張る「並徳利」と首が長く肩がなだらかな「首長徳利^{くびなが}」の2種類が大半を占め、他に「樽型^{たる}」、「瓶形^{びん}」などが生産されました。また、容量では一升^{いっしょう}のものが一番多く、次いで五合^{ごごう}、三合等^{さんごう}も生産されました。

高田徳利は、現・佐賀県^{ありた}有田町を中心とした「有田」、現・兵庫県丹波篠山市^{たんばさやま}の「丹波立杭^{たんばたちくい}」とともに通い徳利の三大生産地として数えられ、高田で生産された徳利は東日本一帯へ、広域に流通しま

した。高田徳利の広域の流通には、高田に隣接する小名田の陶器商が一役買っていたとされます。



高田で焼かれた貧乏徳利

(3) 小名田^{おなだ}の陶器商

小名田は、高田と同じく江戸時代からの徳利生産地でしたが、良質の陶土に恵まれませんでした。そのため、明治時代以降に窯屋の多くが高田の徳利を販売する商人に鞍替えしていったとされています。この小名田の陶器商は徳利の見本^{かほん}を鞆^{かぼん}に入れて東日本の各地をまわり、その地の酒屋等で徳利に書く文字の注文を取る方法で高田の徳利を販売しました。特に、明治33年(1900)に多治見駅が開業したことにより、小名田の陶器商はその鉄道を利用して新たな販売先を開拓し、その流通範囲を拡大しました。

(4) 徳利の生産工程

近代の徳利作りの工程は、まず山から採掘した原土を陶器の原料(陶土)にするために【土打ち】と呼ばれる粒を揃える作業を行いました。水を含ませた粘土を素足で練る作業で、練りあがった粘土を10貫目(約 37.5 kg)の玉にして、寝かせました。この作業は当時の丁稚奉公の下廻し(雑用係)がするものとされ、肉体的に厳しい作業であったとされます。

次に【成形】となり、轆轤で成形する専門の職人が担当して、粘土を徳利の形状に形作りしました。型の代わりに自分のこぶしを当てて、徳利の胴から肩を成形する「こぶし上げ」と呼ばれる技法が難しく、この技法の習得で挫折する人が多かったとされます。また、一升以上の徳利になると、こぶしではなくコテを使用して成形しました。口縁部の成形は、一度漏斗形に広げた後に、余った部分を折り曲げて成形しました。そのため、徳利の口縁部は首より厚くなっています。成形の仕上げには、「メタテ」という竹製の道具をたわませて肩の形状を整え、さらに筋をつけて化粧をします。成形後の轆轤からの切り離しには、藁で擦った切り糸を使用しました。

その後の【半乾燥】の段階で、一度天日乾燥を短い時間で行います。そして【仕上げ】となり、削り専門の職人が生乾きの徳利の底部を削って高台部分を削り出しました。削りには赤松製のヘラが使用されました。仕上げられた徳利は十分に【天日乾燥】を行い、【印入れ】として発注元の名前や屋号などを筆書きします。筆書き作業は、注文をとった商人側の仕事で、窯屋に出向いて行いました。その後に釉をかけた徳利を窯で【焼成】し、次いで【窯出し】を行った後、注文を受けた商人による【検品】が行われました。検品の際には、水を張った桶等に徳利を一本ずつ入れて、徳利内に息を吹き、泡が出るかどうかを確認しました。泡が出た場合は水漏れ穴があるため、その大きさを確認し、大きければ割って廃棄し、小さければ生漆に小麦粉を練り混ぜて糊としたものを

穴に擦り込み塞ぎました。出荷の際には、【荷造り】が行われ、一升徳利3本、二升徳利2本を細縄で結いてまとめ、藁で包んだ上に菰で巻いて出荷しました。

(5) 瓶形の徳利

高田で焼成された徳利は、明治から大正時代を通してその生産は隆盛を極め、特に大正12年(1923)の関東大震災直後の物資不足時には、徳利の注文が殺到してさらなる好況を迎えました。しかし、その後の昭和初頭に誕生したガラス製一升瓶の台頭により、高田徳利は酒容器の市場を追いやられ、その需要が激減していったとされます。高田の窯屋は、徳利生産の代わりに汽車土瓶や鶏水呑の他、湯たんぼや漬物容器、耐火土瓶などの別器種生産への転換に舵を切り、高田の徳利は昭和40年代半ば頃(1970年前後)の地酒や民芸品ブームによる徳利の需要が急増するまで、その影を潜めました。

しかし、その中でガラス瓶に対抗しようと、陶器製の瓶形の徳利が焼成されました。それまでの高田徳利よりも焼成後の器面は白く、筆書きされる文字も発色の良い人工呉須(ペロ藍)に変わり、文字が書かれました。また、瓶形徳利の特徴として陶器製の栓を針金できつく締める「機械栓」の仕組みが用いられました。そして、昭和10年(1935)頃からは鋳込み成形で作られるようになりました。この瓶形徳利が焼かれていた期間は短く、昭和15年(1940)頃の高田での徳利生産の休止とともに瓶形徳利もその役目を終えました。



瓶形徳利(左:表、右:裏)

5. クロム青磁

明治時代以降の磁器の種類の一つに、クロム青磁と呼ばれる一群があります。クロムとはクロム化合物のことで、青磁とは大陸で古来焼成された青緑色の釉薬が掛けられた器のことです。

青磁は、後漢時代の紀元後1世紀頃の現・中国浙江省北部の越州窯で焼成されたやや暗色の緑色釉が掛けられた器から、その歴史が始まります。その前から緑色釉が掛かった青磁に近い器は、焼成されていたそうですが、ムラなく緑色釉がかかった越州窯のものが青磁として完成したものとされます。青磁独特の緑色釉は、鉄を呈色剤(発色・変色の化学反応に使われる成分)とした釉薬を酸素が供給されない状態にして焼成する還元炎焼成を行うことにより、その鮮やかな色を発色させています。越州窯では、3世紀ごろには鑑賞用として名高い古越磁と呼ばれる青磁を生産し、9世紀頃には東は日本、西はエジプトまで広域にその青磁を流通させました。南宋時代の12世紀に入ると、越州窯の一窯であった浙江省の龍泉窯で、それまでの陶胎(陶器質の素地)ではなく、磁胎(磁器質の素地)に青緑色の釉薬をかけた青磁が焼成されました。日本にも多く輸入され、中世の様々な

遺跡から出土しています。

日本で青磁が焼成されたのは、江戸時代前期の17世紀前半に、伊万里が最初でした。明治時代に入ると、日本の趣味人がこぞって宋時代の中国青磁に憧れを持ち、その青磁を目標に多くの作家が青磁を焼成しました。クロム青磁はそのような人々の青磁の憧れの中で導入された新技術で、多くの人々を魅了しました。

クロム青磁は、クロム化合物中の酸化クロムを使用して釉薬を緑色に発色させた青磁で、明治10年(1877)頃には生産されていたとされます。クロム青磁は、それまでの鉄を呈色剤とした青磁釉と比べて、釉を厚く掛ける必要がなく、少量で安定した発色が得られるため、様々な窯屋でその技法が導入されました。その器種は様々で、盃や燗徳利の酒器のほか、鉢や皿、湯飲みの食器類から植木鉢なども生産されました。



クロム青磁(左から徳利、盃、湯飲み)

ちょこっと豆知識3「クロム青磁の植木鉢」

食器から少し離れ、ここでは植木鉢について解説します。植木鉢は近世の江戸における園芸ブームに伴い、様々な種類が生産されました。植木鉢としての専用の鉢が生産される前は、土器の甕や瀬戸産の陶器半胴甕等の底に水抜き用の穴を開けた転用植木鉢が使われました。瀬戸では18世紀の後半以降に本格的な植木鉢が生産され始め、染付の鉢の他に特徴的な瑠璃釉の鉢、ルスと呼ばれる緑釉の鉢などが焼成されました。そして近代になると、それまで国内向けの商品として生産された各植木鉢は、家具装飾品としての輸出品の評価を受けて欧米の万国博覧会へ出品され、また、内国勸業博覧会への出品物としても焼成されました。国内需要のための生産もされ、江戸時代から続く染付、ルス、瑠璃釉に加え、青磁、上絵付などの植木鉢が登場し生産されました。青磁には先述の酸化クロムの青磁釉が掛けられた植木鉢が焼成されましたが、瀬戸産のクロム青磁の植木鉢の特徴として、花鳥図が描かれることが挙げられます。青や緑・茶・赤・黒の顔料を使用し、白絵具を盛り上げて描く白盛りと呼ばれる上絵付も用いられ、花鳥図が描かれています。

富士見市の谷津遺跡では、花鳥図を描いたと思われる(花図の可能性もある)クロム青磁の植木鉢が出土しており、瀬戸で焼かれたものが富士見市に流通して使われたものと考えられます。



左:富士見市谷津遺跡出土のクロム青磁植木鉢(生涯学習課蔵)

6.市之倉の盃

高田の徳利と同様に明治時代から昭和前期の東濃における酒器の盃や燗徳利の生産は、分業制による産地の住み分けがありました。盃のほとんどは、市之倉(現・岐阜県多治見市)で、燗徳利は下石(現・岐阜県土岐市)で生産されました。特に盃は、当時の全国生産における90%以上を市之倉で生産していたとされ、現在でも盃の町として知られています。近代の市之倉で焼成・生産された盃は単に酒を飲むだけでなく、地域の行事等の記念や兵役を終えた際の満期除隊の記念品として生産された盃がありました。それらの盃の多くは、釉薬を掛けて窯で焼いた本焼きの後、金の文字等で記念内容や日付、名前等を書いたものを焼付け窯と呼ばれる窯で本焼きより低温で焼きあげて作られています。

市之倉で生産された盃の多くは、平盃(ひらさかずき・ひらはい)と呼ばれる木製の盃と同形の平たい盃でした。当時の市之倉で盃を焼成していた職人からの聞き取りでは、大きさが二寸～二寸四分、二寸五分、三寸の平盃が多く生産され、四寸の平盃は結婚式用で生産されたそうです(一寸は約3cm)。焼成・生産された盃は、高田徳利の販売と同様に多治見の商人により販売され、全国に流通しました。

市之倉で盃が特産となった理由にはいくつかあり、その一つに材料となる陶土が市之倉では乏しかったため、陶土が少なくて済む盃や湯飲みなどの小形製品が適していたことが挙げられます。また、明治33年(1900)の多治見駅開業により、鉄道による陶磁器類の流通手段が確立されますが、その多治見駅から距離があり他の地域と比べ地形的に不便であった市之倉では、生産された商品を運搬するのに容易な小形の製品に頼るようになったとも言われています。



市之倉の位置図

7.記念の盃

市之倉では、焼成された盃のうち、盃の内外面にベロ藍や金字で、行事や出来事を記念してその内容を記した記念盃がありました。記された行事・出来事の内容は多岐にわたります。記念盃を依頼して製作した側も消防組や在郷軍人会等様々です。記念盃は、各種の記念事に対して製作側から関係者に配布されたもので、ここまで見てきた「日常で使っていた器」と異なります。しかし、地域の行事や出来事を知ることのできる好資料であるため、ここでいくつか紹介します。

①【金馬簾披露式を記念した盃】

書かれた文字は「金馬簾披露式 鶴瀬消防組 昭和二年十一月」で、昭和2年(1927)に鶴瀬村消防組が金馬簾の授与を記念した盃です。この披露式は、現在の鶴瀬小学校の前身である鶴瀬尋常高等小学校で行われました。馬簾とはまといに下がった带状の飾りを指し、金馬簾は消防の功績が優秀な消防組に与えられる金色の一条の馬簾です。まといに下がる金馬簾の本数が多いほど優秀な消防組とされ、人々に称えられました。大変名誉なことであったため、披露式での記念の盃として配られたものと考えられます。また、昭和4年(1929)には南畑消防組も金馬簾が与えられ、それを記念した盃も当館に収蔵されています



金馬簾披露式を祝した盃(鶴瀨消防組)



金馬簾披露式を祝した盃(南畑消防組)

②【砂川樋管竣工式を記念した盃】

「砂川樋管竣工式 昭和二年九月」と書かれています。砂川樋管は、大正時代から昭和前期にかけての新河岸川改修時に建造された樋管です。昭和2年(1927)に完成し、新河岸川増水時に砂川への逆流を防ぎました。

新河岸川改修時の建造物として最後まで残されたものでしたが、現在は取り壊されています。



砂川樋管竣工式を祝した盃

③【水谷村在郷軍人会の基金目標達成を祝した盃】

「水谷村分會基金三千円完成披露式」が書かれた盃は、在郷軍人会水谷村分会の基金作りを達成した記念盃です。水谷村分会は、明治44年(1911)4月に設立され、大正6年(1917)7月に会の基金造成計画を立て、全村民に寄付の呼びかけが行われました。大正11年(1922)10月までに3,000円の基金が集まりました。



水谷村在郷軍人会の目標基金達成を祝した盃

④【彰忠碑建設を記念した盃】

「彰忠碑建設記念 鶴瀨村」と書かれた盃です。日清戦争や日露戦争での戦死者・従軍者のほか、第一次世界大戦従軍者やシベリア出兵者の名前が刻まれた彰忠碑を昭和5年(1930)9月に建てたことを記念しています。彰忠碑は、戦争での功績を広く知らせるための碑です。この碑は現在、上鶴馬氷川神社の境内に設置されていますが、以前は鶴瀨村役場敷地内(現在の鶴瀨公民館の地)に建てられていました。



彰忠碑建設を記念した盃

8.除隊記念の盃や燭徳利

明治時代から昭和前期まで、日本は諸外国との戦争の時代でもありました。そのため、健康な男性などは兵役として、兵営に入り訓練を行いました。兵営に入る際には親族や知人、地域の人々から餞別を受けて見送られました。そして、兵役が満期となり除隊する際に、餞別や見送りの返礼として贈った品が除隊記念の市之倉の盃や下石の燭徳利でした。市之倉で生産された除隊記念盃は、平たい平盃と小振りで器高のある猪口形のものがあります。

それらの盃や燭徳利には、様々な文字が書かれていましたが、その多くは除隊を記念した文言で、「除隊記念」や「凱旋記念」、「満期記念」のほか、兵役中に戦地に赴いて無事帰還したことを記念した「従軍記念」、「出征記念」などが書かれています。また、「支那事変」、「征露記念」などの戦役の名称のほか、所属部隊名も書かれています。

また、文字とは別に軍や戦争に関連のある意匠や、文様が描かれています。多くに描かれているのは、「日章旗」や「旭日旗」のほか、当時の陸軍・

海軍を象徴する「桜」や陸軍を象徴する星章である「五芒星と桜葉」、海軍を象徴する「桜と錨」などです。また、「大砲」や「機関銃」、「銃剣」、「軍帽」等の軍備品のほか、騎兵連隊を象徴したと考えられる「馬」、鉄道建設・修理などを行う鉄道連隊を象徴する「機関車」、縁起物である「鶴と亀」など、その意匠・文様は多岐にわたります。

文字や意匠・文様で彩った除隊記念盃ですが、さらにその器形や器面にも工夫を凝らしたものがあります。一部の盃には、「桜浜(さくらはま)」と呼ばれる高台が桜型に成形されたものがあり、旧日本軍を意識したものとなっています。また、器面も一部のものに軍歌の歌詞等が刻印され、「記念品としての盃」を意識して生産していたことがうかがえます。

※文章中の表記は、盃に記された文字を当時の用語としてそのまま掲載しています。

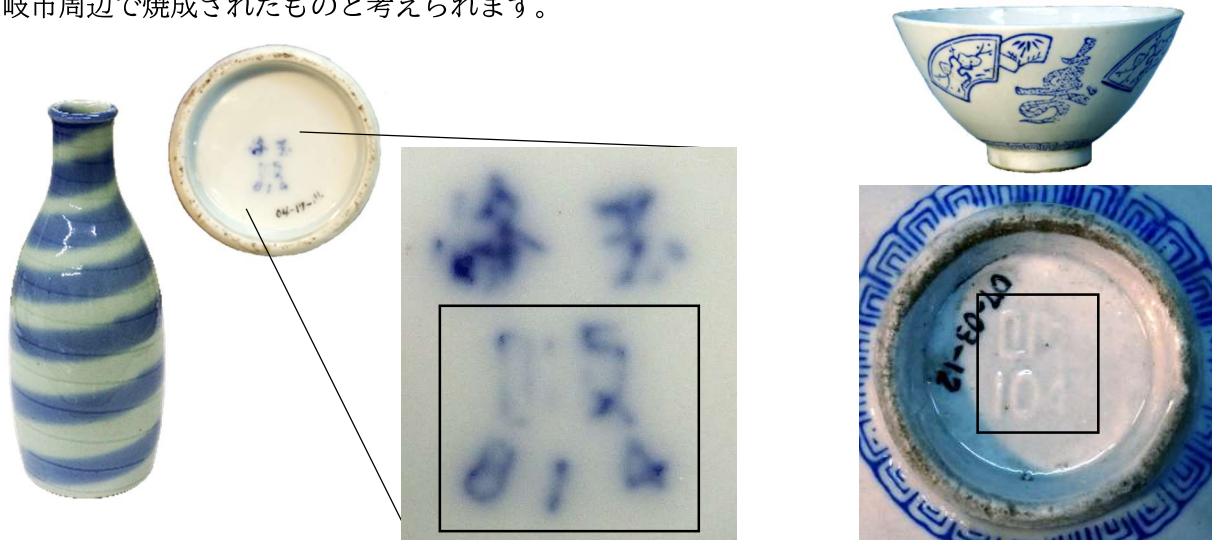


様々な意匠・文字の除隊記念盃

ちょこっと豆知識4「統制食器」

戦時下の昭和16年(1941)に配給物資量の確保と価格の安定を目的として、日本国内の産業生産品の管理のための記号・番号を付した陶磁器が焼成されました。この陶磁器を俗に「統制食器」や「統制陶磁器」などと呼びます。茶碗や皿の底部等には、ベロ藍や型押しで記号と番号が付けられました。それらは産地の略号と数字の組み合わせで、生産者毎に一種類の記号・番号が与えられ、窯元はそれを器に記しました。

当館所蔵の茶碗(飯碗)と爛徳利には、土岐の「岐」の産地記号と数字が刻まれていることから、現在の岐阜県土岐市周辺で焼成されたものと考えられます。



統制食器の爛徳利(左)と茶碗(右)

9. 印物

「印物」とは、店名や屋号などの「印」を入れた器のことです。印を入れた銅板やゴムの版が作られ、染付や上絵付により器面に転写されて生産されました。東濃で生産された盃や小皿などに印を入れる注文を、多治見の商人が消費地の問屋を介して受けて生産・販売したほか、印物だけを扱う「印物屋」が直接そのやりとりも行っていました。この印物屋は元々、高田徳利等を販売した多治見の商人が始まりでした。商人らは、昭和前期にガラス瓶が市場に出回るようになり高田徳利の需要が落ち込むと、盃や湯飲み、小皿などに店名

や屋号、そして商標などを入れた印物を販売する印物屋へ転じました。そのため、印物の受注元は、多治見の商人が高田徳利や盃の販売をしていた酒屋から始まったものとされています。その後、醸造店や肥料店、喫茶店などに取引先を拡大し、戦後、商人らは印物屋として大きく発展していきました。

印物は、酒店や商店等が年末年始等の挨拶代わりに顧客へ配布する等、広告の役目を持っており、店名などとともに、住所が記されることも多くあります。



印物の湯飲み

10.遺跡出土の近代陶磁器

明治時代から昭和前期の陶磁器は、遺跡の発掘調査でも出土します。

富士見市内の谷津遺跡では、近代のごみ穴から陶磁器類が多く出土しました。一括で廃棄された状況と捉えられ、出土した陶磁器は割れた状態で見つかっています。器種の内訳は、磁器の盃や湯飲み、茶碗(飯碗)、小皿、中皿、爛徳利、急須、陶器の爛徳利、灯明皿、鍋蓋、クロム青磁の盃と植木鉢等です。磁器の盃や茶碗、皿、爛徳利などは、印判手の型紙摺りを中心に銅版転写や手描きしたものもあり、およそ明治時代末から大正時代頃に廃棄されたものと考えられます。

遺跡から一括で出土した近代陶磁器は、より忠実に当時の人々が食卓で使用していた食器の構成を、現代の私達に伝えてくれます。



谷津遺跡出土の近代陶磁器群(生涯学習課蔵)

【主要参考文献】(発行年代順) ※ホームページは閲覧日

- ・一瀬武 『美濃焼の歴史』 郷土文化研究所 1966 年 3 月
- ・伊藤喜栄 「市之倉のさかずき」『東海の伝統工芸』 中日新聞本社 1985 年 12 月
- ・多治見市 『多治見市史 通史編下』 1987 年 3 月
- ・笠原町 『笠原町史 その四 かさはらの焼き物』 1991 年 3 月
- ・瀬戸市歴史民俗資料館 『明治時代の瀬戸窯業 -時代を彩ったやきもの-』(特別企画展図録)1993 年 8 月
- ・富士見市教育委員会 『富士見市史 通史編 下巻』 1994 年 10 月
- ・矢部良明 『角川日本陶磁大辞典』 角川書店 2002 年 8 月
- ・富士見市立難波田城資料館 『むらをまもる消防』(平成 15 年秋季企画展図録) 2003 年 10 月
- ・橋本忠之 『近代のいんばん手 -その意匠と時代背景-』 天空舎 2006 年 10 月
- ・庄内昭男 「陶磁器から見た昭和時代の秋田 -秋田県内発見の統制陶磁器を中心として-」 『秋田県立博物館研究報告第 35 号』 2010 年 3 月
- ・多治見市教育委員会・文化財保護センター 『多治見の陶器商と近代の美濃焼』(企画展パンフレット) 2011 年 7 月～12 月
- ・栗東歴史民俗博物館 『平和のいしずえ 2013』(企画展パンフレット) 2013 年 7 月～9 月
- ・多治見市教育委員会・文化財保護センター 『高田徳利 ～高田の窯屋と小名田の商人～』(企画展パンフレット) 2014 年 1 月～8 月
- ・瀬戸市・公益財団法人瀬戸市文化振興財団 『瀬戸の植木鉢-園芸ブームを支えた江戸・明治のうつわ-』(瀬戸蔵ミュージアム企画展図録) 2014 年 2 月
- ・多治見市教育委員会・文化財保護センター 『高田陶祖 400 年記念 ～高田焼の歩み～』(企画展パンフレット) 2016 年 3 月～8 月
- ・瀬戸市・公益財団法人瀬戸市文化振興財団 『瀬戸の青磁-その始まりと展開-』(瀬戸蔵ミュージアム企画展図録) 2021 年 1 月
- ・富士見市 『市制施行 50 周年記念 新版 富士見のあゆみ』 2023 年 3 月
- ・富士見市教育委員会 「市内遺跡発掘調査」『富士見市文化財報告第 76 集』 2024 年 3 月
- ・多治見市美濃焼ミュージアムホームページ

URL:https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum/archives/digital-2120

2025 年 10 月閲覧



なんばたじょう
難波田城
FUJIMI MUNICIPAL MUSEUM

令和7年秋季企画展図録
日常使いの近代「セトモノ」展
～蔵に眠っていた食器～

編集・発行 富士見市立難波田城資料館
〒354-0004

埼玉県富士見市大字下南畑 568-1

Tel.049-253-4664

Fax.049-253-4665

発行日 令和7年11月15日